

それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決してないほどの苦難が来るからである。主がその期間を縮めてくださらなければ、誰一人救われない。しかし、主はご自分のものとして選ばれた人たちのために、その期間を縮めてくださったのである。（マルコ福音書13章19節～20節）

主イエスはエルサレム神殿の崩壊を予告された。弟子たちは、ユダヤ人の誇りであり、魂の寄る辺である壮大な神殿の崩壊は考えられないことで、崩壊するとすれば、それは終末の時だと思った。だから、終末はいつ起こるのか、その時にはどんな徴があるかを問うた。主イエスは答えられた。時代は混乱し、天地も揺れ動き、産みの苦しみが始まる。あなたがたは主イエスのために迫害を受けるが、聖霊を受け、福音を全ての民族に証しすることとなる。肉親同志も反抗し合うが、最後まで耐え忍ぶ者は救われる、と。

続いて、「荒廃をもたらす憎むべきものが、立ってはならない所に立つのを見たら — 読者は悟れ — その時、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい」と言われた。「荒廃をもたらす憎むべきものが、立ってはならない所に立つのを見たら」という言葉は、ダニエル書9章27節bに「憎むべきものの翼の上に／荒廃をもたらすものが座し」からの引用で、ユダヤ人にとって、紀元前2世紀、シリアのアンティオコス四世エピファネスを指す常套句であった。彼は神殿にローマの主神ゼウスを祭り、安息日や割礼を禁止し、ユダヤ人が汚れた動物とした豚の肉を食べさせ、ユダヤ教徒を徹底的に迫害した。

主イエスは、エピファネスの時代のような反神的な惨劇が起こる。その時には、①山に逃げなさい。②屋上にいる者は下に降りてはならない。③家にある物を取り出そうと中に入ってはならない。④畑にいる者は上着を取りに戻ってはならない。⑤身重の女と乳飲み子を持つ女に災いがある。⑥この困難が冬に起こらないように祈りなさい。⑦天地創造の初めから今までに、起こったことがないほどの苦難が来る。⑧主がその期間を縮めてくださらなければ、誰一人救われない。⑨主はご自分のものとして選ばれた人たちのために、その期間を縮めてくださる、と言われた。この悲劇的な出来事は、紀元70年、ローマ軍によるエルサレム滅亡の様を表現しているのではないか。エルサレムはローマ軍に包囲され、兵糧攻めにされた。革をかじり、泥水をすすり、我が子を食するほどの飢餓に見舞われ、悲惨に崩壊した。あのエルサレム滅亡の時のような未曾有の苦難が来る。

その時、「見よ、ここにメシアがいる」「見よ、あそこだ」と言う者がいても、その言葉を信じてならない。偽メシアや偽預言者が現れ、不思議な業を行い、私を信じ、従えば救いが得られると人々を惑わす。それらの偽りに気をつけていなさいと言われた。

主イエスは終末が来る時の徴を語っておられるが、それは、現代の現状を語っているのではないか。自然は破壊され、豪雨と干ばつに襲われ、飢餓に苦しむ人々は何億人もいる。戦火は途切れることなく、惨たらしい戦死者が続出し、子どもと女性の痛ましい死を聞かない日はない。その混乱の中で、自分がメシアとは言わないが、従って来い、そうすれば、安楽と快樂が得られると、人びとを誘いこもうとする輩は後を絶たない。そのカオスの中、教会は主イエスの福音を懸命に語り続けている。主イエスが語られた終末の徴は、今の有様である。そうならば、明日にでも、終末、歴史の終わりが来てもいい訳である。終末信仰は全き救いを信じて、カオスの今を望みに生きることである。